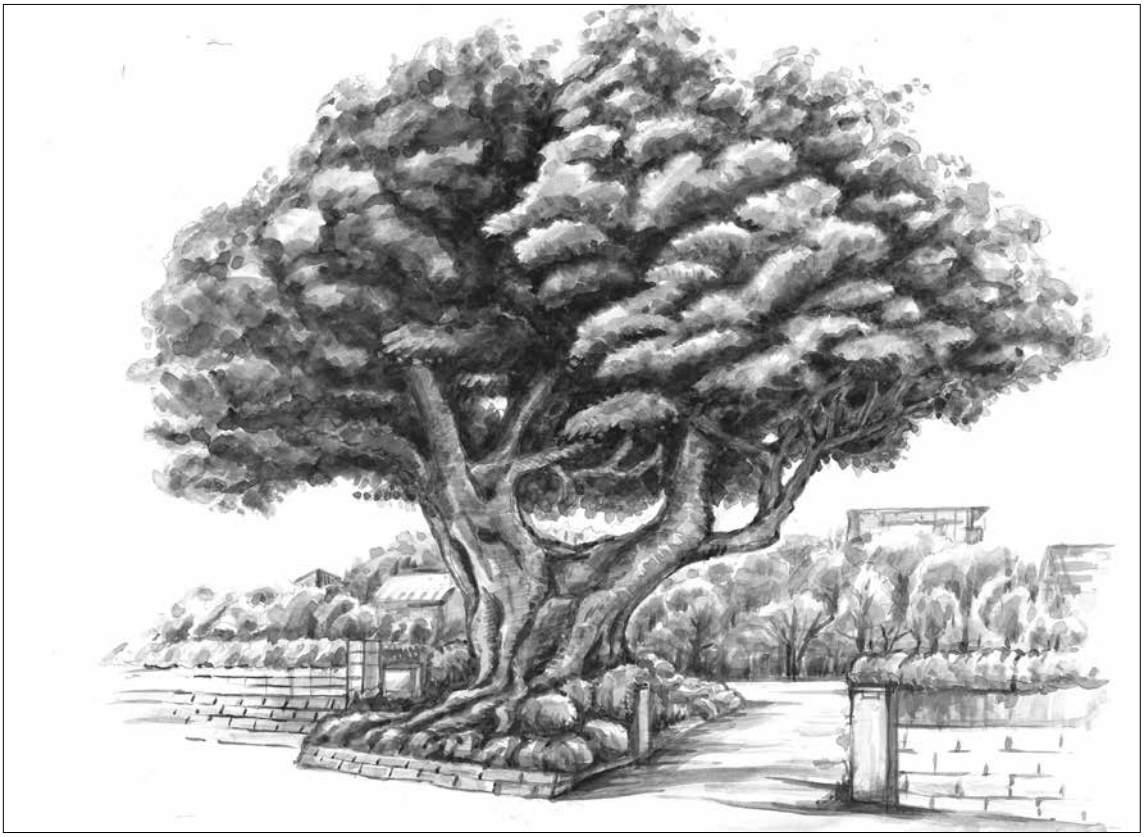
かるむし

68

麻生区文化協会会報



時代をみつめて八百年　タブノキ（椨の木）

千代ヶ丘終点のバス停から、閑静な住宅街の坂道を数分ほど歩くと、左手に大きな樹影が目に飛び込んできます。それがこのタブノキです「川崎市まちの木」に指定され、樹齢八百年という長い時代を生き抜いた巨木として、地域の人々に親しまれています。

案内板によると、タブノキはクスノキ科に属する照葉樹で古くから大楠と呼ばれてきましたが、所有者の先祖、楠木正成の一族が足利幕府の時代にこの地に移り住んだとされる約五百年前には、すでにこの場所にあったそうです。また、近くにある香林寺の大日如来供養碑を建立した楢村氏（徳川家康に仕えたときに楠木から楢村に改氏）が、楠木一族の目印としたのが、このタブノキであったとも伝えられています。大正時代には、高さ30ｍにもなり、森のような様相を呈していましたが、戦時中に防空のため幹を伐採してしまったそうです。伐採の傷口は強靭な生命力で自らふさぎつつ、現在にいたるまで力強く成長しています。

ある時、ふと見ると大きく広がっていた常緑の枝葉がすっかり消えて太い幹と枝だけになる強い剪定が行われていました。「まちの木」として、当家では定期的に業者に依頼し樹勢を管理しているそうですが、毎年生き生きと新しい枝葉を広げる逞しい回復力はいまだ健在です。現在は、樹高７ｍ、枝張り11ｍほどに整えられていますが、どっしりと安定感のある樹形からは無言の迫力が伝わってきます。

これまでに数々の自然災害や戦争、人々の苦しみも喜びも見つめてきたであろうタブノキは、いつもこの場所にてしっかりと太い根を張り、耐え抜いてきました。いま、世の中を席巻するコロナウイルス禍に何を思っているのでしょうか。その堂々たる姿を見上げていると、ウィルスに負けるな、根気強くがんばれ、と励まされているようで、すこし心が落ち着いてくる気がしてきました。

絵と文　小田島　寛

からむし六十八号のラインナップをご紹介します

P１　**麻生区の風物紹介**
今号の表紙は小田島寛さんによる「時代をみつめて八百年 タブノキの紹介」。

P２　**コロナ戦争の後に**
新役員会の会長に選出された菅原敬子さんが地域の振興に文化の力が重要と力強く語ります。

P３　**芸術のまちづくりに携わりながら**
文化サロン部長板橋さんは地域興課の経験を活かして芸術・文化の振興に貢献したいと語ります。

P４　**野生生物と都市住民が共生する街　麻生**
夏休み親子教室に「鶴見川と生き物」に協力いただいている堂前さんが、自然と共生する都市文化への期待を語ります。

P５　**総会報告・受賞者紹介**
書面審議された総会を報告します。また、本年度の文化祭奨励賞、麻生区文化振興賞の受賞が決まった方々の紹介です。

P６　**新役員紹介**
新役員に選ばれた方々を紹介します。

P７　**アルテリッカ新ゆり美術展２０２０報告**
第三六回かわさき市民芸術祭報告
美術部門は二月十八～二十三日に開催、舞台部門は中止されました。

しんゆりステーションピアノ
新百合ヶ丘駅改札口前にだれでも弾けるピアノを設置した岩倉さんが芸術・文化のまちづくり推進の趣旨を紹介します。

P８　**会員の活躍**
梶亨さん「柿生の里の物語」出版
木村幾月さんが産経国際書展で受賞
佐藤勝昭さんが絵画寄贈で紺綬褒章受章
文化協会のこれから

コロナ戦争の後に

麻生区文化協会　会長　菅原　敬子

「はじめに」

外は桜の花も終わり若葉・青葉が風にそよぎ、まさに薫風の季節を迎えています。麻生区文化協会は今年三十六周年を迎え更に一歩を踏み出そうとあれこれ論じていたところでしたが、新型コロナウィルス禍はすさまじい勢いで世界中を巻き込み戦争の体を見せつけられ、文化協会の総会は開催できませんでした。しかし会員の皆様のお陰で投票による意志の確認ができ、新年度をスタートすることができましたことにお礼申し上げます。

又、会長を引き続き担わせて頂くことになり新体制での役員の皆様と共に会の充実・発展の為に微力ですが頑張って参りますので、どうぞ宜しくお願い致します。

二〇二〇年度、四月十六日～五月六日まで「新型コロナ緊急事態宣言」は全国に拡大され、人の移動もままならなくなりました。文化協会だけではなく麻生区の文化に係るすべての事業が中止・延期されました。新型コロナウィルスは普通に元気だった人でも感染すると一気に肺炎になり重症化する、或いは死に至る等の恐れがあることが連日報じられてきました。このような外的要因に手の打ちようもなく、じっと見守り待つばかりであると共に「自己責任」を感じ外出を自粛したり、三密を避けたり、まさに他者への責任を転化できない状況下で過ごしたことは会員の共通するところです。

「コロナのせいにするな！」

しかしこれからがこの災害を乗り越え、どんな活動をスタートさせることができるかが問題なのです。皆さまはこのコロナの危険を体験し何を感じましたか、何をまなびましたか。文化振興、その振興の一端を文化協会は担っていると思うのです。その一つは文化をとおし人と人との交流を広める。二つは地域の人との係わりの上にたって経済効果をもあげる。三つは地域全体をみるとき、それは地域・活性化に役立つと共に、地域の伝統・歴史を残すことです。

「新しい風と創造」を掲げ今年度もスタートします。この間集まって音楽をきけない、演奏できない、歌えない。映画も舞台も観れない、踊りも吟もできない、絵も生花も…。どの会場も使えないそんな中で麻生区にある文化的施設とその役割の大きさと、そしていかに人々に潤いと活力を与えてくれていたかを感じさせられる日々であり、罹患者数、死亡数という統計上の数字が躍り誰でもその一員となるかもしれない不安感、圧迫感を感じさせられる日々でした。この重い壁をはねかえし文化活動の再開をめざし、粛々と動き出そうと思うのです。それは私たちのように地元で、地元のみなさんとつくりあげている身近な文化を守り、生活や生きがいに潤いと元気活力をうみだす文化を守り発展・継続させていくことであり、その力の一部として文化協会があるのです。まずはその文化協会の活動をスタートさせることだと思うのです。

そしてコロナ後、この時代の何がどう変わっていくのか、目をこらして見ていきたいと思います。そこで、私たちは掛け替えのない文化協会を礎にくらしの中に文化芸術が薫る街づくりを目ざし地域の人々、文化芸術活動をこれからも進めていきましょう。このコロナを契機に、又教訓として文化協会の一層の推進の為に地域に密着した活動を展開していきましょう。併せて、私たちは少し広い目をもつことも大事なのではないでしょうか。

歴史的にみるとウィルスのパンデミックは世界的にもこれから全人類にかかる不幸であり、それは三つあるといわれています。「感染症の世界史」の著者 石 弘之氏によれば、アフリカのエイズの蔓延に見ることができるように第一は「ウィルスのパンデミック」第二は「火山の破局噴火」第三は「津波」だといっています。その中で最も確率が高いのが「ウィルスのパンデミック」だというのです。今から百年前のスペイン風邪は世界人口の三～五％が死亡し、全世界で五千万人以上もの死者を出したというのです。第一次世界大戦の死者は約一千万人。その五倍もの命を奪いました。コロナウィルスはインフルエンザと同様野生動物の世界で流行したのがヒトの世界でも流行するようになった「人獣共通感染症」だということです。SARSやMERSも多くの動物での感染が確認されており、もともと由来はコウモリだと考えられているとのことです。日本における季節性インフルエンザの死亡者数は約三千人だそうです。今回の流行が仮に一旦収束しても再流行する第二・第三波の可能性があり、毒性が高まることもあり、第一にワクチン・治療薬の研究が必須であり、早期に完成することを願わずにはいられません。そして戦争以上の死者をだす「ウィルス」への対応は人類共通の課題であり、戦争どころではなく、全世界共通して第一に取り組む課題であると考えるのです。

「文化には力がある」

産業革命は世界を大きく変えました。産業だけでなく世界の文化をも大きく変えたのです。日本の文化が「新型コロナウィルス大革命」に消滅させられることなくこれからも継承発展していってほしいと思います。

私たちは地元で着々と進めて参りましょう。部門を問わず、流派を問わず、分野を問わず、好き嫌いを問わず、誰でもがどの部門の活動にも関心をもち、出来るだけ出席や来場し支えあうこと。麻生区文化協会の目標・モットーは「ワンチーム」になって進めよう。「ワンチーム」それこそが大きな力になるのです。「新しい風と創造」を推進するための力として。

文化協会への期待
～芸術のまちづくりに携わりながら～

文化サロン部　板橋　洋一

昨年、文化協会に仲間入りさせていただいた新参者です。よろしくお願いします。川崎区で生まれ育って六〇年余。いわゆる川崎ディープサウスにどっぷり浸かった半生ですが、訳あって三年ほど前から、黒川の里山近くに居を移しました。

七色の煙たなびく悪臭と煤煙の中で、工場のサイレンを時計代わりに育った私にとって、小鳥のさえずりで目が覚め、四季の草花や星座を眺めながら深呼吸できる生活は、望外のものでした。いま、自然を感じながら余生を過ごす歓びを実感しているところです。

長い市役所生活の中で四年間、麻生区役所でお世話になった縁で文化協会にお誘いいただき、いまだにバンカラこそ男の美学だと信じている私が麻生の文化に融和できるか不安ではありますが、「以後見苦しき面体お見知りおかれまして、恐惶万端よろしくお願い申し上げます。」と寅さん風に仁義を切らせていただきます。では本題に入ります。

しんゆり芸術のまちづくり

麻生区では、開区以来新百合ヶ丘駅周辺を中心に「芸術のまちづくり」が進められてきました。分区と時を同じくして、里山だった場所に忽然としてできた新百合ヶ丘駅。新たなまちづくりのコンセプトとして、『芸術・文化』を置いた先人の啓明に敬意を表します。

麻生区文化センターが市民の要望と努力で実現され、麻生音楽祭やしんゆり映画祭などが市民の手づくりによってつくられ、昭和音楽芸術学院や日本映画学校が進出しそれぞれが大学にまで成長し、アートセンターやアルテリッカなどさまざまな施設やイベントが生まれ、芸術のまちづくりが絶えることなく連綿と続いていることは、私のわずかな経験からですが、川崎市内のまちづくりの中でも稀有なことです。その一角を麻生区文化協会が担い、屋台骨を支えているのもまた稀な仕組みです。

まちは生き物です。また、まちづくりは少なくとも三〇年の長い年月を要するものといわれています。当初は高邁な理想を掲げ、それなりの投資や人材を背景に活発に取り組むことになりますが、金の切れ目が縁の切れ目、またどこも後継者へのバトンタッチの課題が生じます。

私が麻生区役所地域振興課に着任したのが十五年前の二〇〇五年。ちょうど万福寺のまちびらきとアートセンターの建設、昭和音楽大学の進出が重なり、地権者の一人であった中島豪一さんはしんゆり第二のまちびらきという表現をされていました。

そして、いよいよ一〇年後には、横浜市営地下鉄三号線が新百合ヶ丘駅に延伸され、王禅寺ヨネッティ付近に新駅が建設されます。それを契機に北口の再開発も見込まれ、まさにしんゆり第三のまちびらきともいえる期待が高まっています。

第三のまちびらき

およそ二十五年周期でまちびらきの契機が訪れるのもまた稀有な例でもあります。結果的には、一世代、一つのまちづくりが三十年とすると、ほどよい程度の引継ぎ期間を挟んだまちの変遷ということになります。これも恵まれたものとなっています。

いつまでも「芸術のまちづくり」が進められていくためにも、市民、行政、事業者の連携が求められていきます。決して、ステークホルダー、つまり関係者だけの開発事業ではあってはなりません。

私の最後の仕事場であった武蔵小杉は、残念ながら、地権者、事業者、行政の関係者だけによる開発だったように思います。一〇年足らずのスピードで戦前から七〇年以上続いた工業都市の街並みが一変しました。町の変化には外的要因や必然性があることは理解できますが、はたしてそこに市民の合意がどこまであったのか。その疑問を抱えながらの仕事でした。むしろ、市民に戸惑いすらうかがえました。武蔵小杉の再開発にはまちづくりのコンセプトが欠けていたように思います。

幸いにも、新百合ヶ丘は、「芸術のまちづくり」というコンセプトが、市民、行政にはしっかりと根付いています。しんゆり第三のまちびらきにも、それを迎える時代にふさわしいバージョンアップした芸術・文化の何かが創造されるでしょう。

芸術・文化ユーザーとして

新しいものを生み出すには、少々くたびれた存在ではありますが、芸術・文化とは縁がなかった自分が麻生区で悟ったことは、「芸術・文化を想像することはできないが、芸術・文化のユーザーにはなれる」ということでした。オペラも、映画も、芸術も、お芝居も、好きではなかったサッカーも食わず嫌いにならないように、重ねて繰り返して観にいきました。そして、それぞれ小さなファンになれた気がしています。

いま、NPOしんゆり芸術のまちづくりの一員として、また麻生区文化協会の会員として、しんゆり第三のまちびらきに少しでもお手伝いできればと思っています。

そして、わたしのライフワークである「人権と平和」も、まちづくりの片隅に置くことができればと思っています。

野生生物と都市住民が共生する街　麻生

堂前　雅史

私は二〇〇二年から、和光大学の学生と一緒に岡上地区を中心に鶴見川およびその流域にある雑木林の自然保護活動を行っていますが、きっかけはその前年に始めた授業です。付近にどんな生きものがいるのかを知らなかった私は、大学が位置する岡上地区の野生生物を調べる授業を始めました。その結果、驚くほど多様な動植物に出会いました。鶴川駅付近の鶴見川では、オイカワ、タモロコ、カマツカ、ヨシノボリといった何種類もの魚が捕れ、時にはアユが捕れることもありますし、清流の鳥と思われているカワセミをよく見かけます。カワセミがいるということは、カワセミを養うだけの魚が棲んでいるということです（鶴見川の支流である麻生川もカワセミをよく見かけます）。大学構内の山林にもいろいろな生物が生息していて教材には事欠かないほどです。

和光大学は文科系の大学で、学生たちはそれほど生物の知識を持っていませんでしたが、都市の環境をちょっと覗き込んでみれば素敵な生きものに出会えることに惹かれ、とうとう授業の枠からはみ出して自然保護団体を作ってしまいました。嬉々として鶴見川流域ネットワーキングの市民の皆さんから投網や雑木林管理の手ほどきを受けている学生たちをみて、これは自然保護ボランティアと言うよりも「道楽」という語が似合っているなと思った私は、この学生グループを「かわ道楽」と名付けました。

そんな活動を続けている中、二〇一三年から麻生区文化協会より「夏休み親子教室」で鶴見川で魚捕りをする「鶴見川と生き物」を担当する機会を頂戴しました。鶴見川を含め都市河川は「汚い川」のイメージを持たれがちです。その上、都市河川は氾濫予防のために深く掘り下げられ、安全のためにフェンスで区切られていることが多く、現代の都市住民にとって、川は決して身近なものではないのです。日常生活では川面を近くで覗くこともなく、川の中にどんな生きものがいるかに思いをはせることも少ないでしょう。「身近な川はどうせ何も住んでいない、親しむ価値が無いもの」と決めつけてしまう人も多いことでしょうが、前述のように川は都市の生物多様性の拠点なのです。

子どもたちに川に入ってもらう時は安全にも最大限の注意を払います。「夏休み親子教室」では浅くてもライフジャケットを親子共に装着してもらい、足もとも怪我しないように履き物にも注意しています。安全と衛生に十分注意してもらえれば、都市部に隠れた、素敵な生きものにぎわう世界の窓が開くのです。

文化協会からいただいた機会は、都市住民と都市の自然の関係を素敵な関係に作り直す機会にしたいなと思っています。麻生区は多くの野生動物と都市住民が共生している点では、非常に価値の高い地域でもあると思っています。そんな自然と共生する都市文化を麻生区から立ち上げていきたい、そんなお役に立ちたいと願っています。

夏休み親子教室　鶴見川と生き物

何がとれたかのぞき込む子どもたち

採集した生きものの解説

令和二年度総会

令和二年四月十八日(土)麻生区役所第二会議室
―新型コロナウィルス感染拡大防止のため中止―

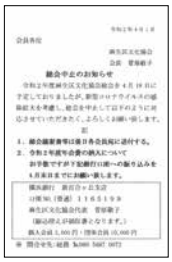
令和二年度の総会は集会による形式を中止とし、書面審議としました。

総会が中止となるのは、文化協会創立以来三十六年目にして始めてのことです。新型コロナウィルス感染症は世界的な規模で、日々拡大し、深刻化する状況下では、全く終息の見通しが立たず、役員会では総会中止の決断をしました。その後、政府の緊急事態宣言、自粛策など二転三転する中、早期に書面審議を図ったことは良策でしたが、残念なことは、役員改選に伴う新旧役員交代の紹介、承認を直接皆様が参加される中で開催できず、又役員退任の方々への労をねぎらう場もなかったことです。また、本会の活動に顕著な功績や尽力されました方々へ贈る文化祭奨励賞、文化振興賞の授与式が未だ実施できないことです。受賞者の方々には、自粛が解消される中で、七月八日の役員会前に贈呈させていただく方向で検討中であります。

いずれにしましても、書面決議でご承認いただきましたので、今後の事業内容、活動も修正や調整を図る必要も予測されますが、今年度は柔軟に臨機応変の対応が必要ではないでしょうか。

◎令和二年度　麻生区文化協会総会　書面表決の結果について

前述の通り書面での審議をしていただき、回答を令和二年四月二十日必着にて書面決議をご提出いただきましたので、結果を報告いたします。


令和2年4月1日
会員各位
麻生区文化協会
会長　菅原敏子
総会中止のお知らせ
令和2年度麻生区文化協会総会4月18日に予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、総会を中止して以下のように決させていただきたく、よろしくお願い申します。
記
1．総会議案書等は後日各会員宛に送付する。
2．令和2年度年会費の納入について
お手数ですが下記銀行口座への振り込みを4月末日までにお願い申します。
横浜銀行　鶴川ロータス支店
口座No.（普通）1165159
麻生区文化協会代表　菅原敏子
（振込手数料は納入者負担となります。）
納入金額 1,000円・団体会員 10,000円
※ 問合せ先：総務 ℡080 5607 5072

議案	賛成	反対
第1号議案	81	0
第2号議案	81	0
第3号議案	81	0
第4号議案	81	0
第5号議案	81	0
第6号議案	81	0
第7号議案	81	0

団体会員37名(内個人会員25含む)
賛助会員1名
個人会員98名(団体会員25含む)
無回答20名
賛成(承認)81名をもって可決

令和二年度　文化祭奨励賞・文化振興賞　受賞者紹介

麻生区の文化・芸術活動を通し、永年にわたり尽力された次の三氏が表彰されます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策で、総会を書面審議としたため、三氏に対する賞状の授与が延期となっていましたが、このほど七月八日の午後二時に第一会議室で表彰式を行うことになりました。

◎麻生区文化祭奨励賞　深野　怜様

麻生区文化協会美術工芸部に所属され、永年にわたり工芸(陶芸)部門を中心に活躍しておられます。茶道具の製作のために茶道を究めるところから始められるなど、真摯な取組みをされています。本会主要事業である文化祭の美術工芸展をはじめ、アルテリッカ新ゆり美術展、かわさき市民芸術祭美術展に毎年優れた作品を出品され、高く評価されております。特に、東日本伝統工芸展に毎年入選されるなど、その芸術性や格調の高さに定評があります。また、文化祭俳句大会では、優秀賞を受賞するなど、才能豊かで高い見識をもって本会に貢献されております。

◎麻生区文化祭奨励賞　山本　彬夫様

麻生区文化協会美術工芸部に所属し、永年にわたり写真部門で活躍されておられます。特に、仲間と共に写真部門の同好会『写遊会』を結成するなど、日頃より意欲的に研鑽を図り、後輩の指導、育成に力をそそぎ、人の繋がりを大切にしておられます。本会主要事業である文化祭での美術工芸展をはじめ、アルテリッカ新ゆり美術展、かわさき市民芸術祭美術展の写真部門に作品を出品され、優れた感性と技術、芸術性が高く評価されております。

また、「日本写真会」にも所属し、作品を発表し受賞を重ねるなど、対外的にも写真に関する第一人者でもあります。

◎麻生区文化振興賞　佐藤　英行様

麻生区文化協会美術工芸部に所属し、また、麻生区美術家協会会長として、本会での「民芸の女優さんを描く」デッサン会では優れた芸術性を駆使し、指導をされておられます。また、麻生区文化祭、かわさき市民芸術祭美術展に毎回素晴らしい作品を出品され高い評価を受けております。今年で第十一回を迎えたアルテリッカ新ゆり美術展は、当初から美術家協会と麻生区文化協会の合同実行委員会で推進され永きにわたり尽力されております。

特に上野の森美術館大賞・二科会特選など受賞、対外的にも高い評価を受けられてご活躍をされておられます。また地域に根ざした文化活動を通し「芸術のまち」の文化振興の推進に多大なる貢献をされています。

(橋本　周　記)

受賞者を囲み、区長・役員・各部代表

麻生区文化協会　新役員紹介

令和二年度の役員は、本来ならば選考委員会で選出し、総会において承認を得るのですが、今年度の総会は総会報告にもあるように中止となり、会員に新役員の紹介の機会がもてなかったため、「からむし」でご紹介することにしました。

誌上でご紹介するに当たり、新役員としての二言をいただきましたので、併せてご紹介いたしますと共に、菅原敬子会長をはじめこれから二年、それぞれの得意分野での活躍が期待されます。

会　長　菅原 敬子
（サロン部・アカデミー部）

今年36年を迎える文化協会。異例のスタートを切る。役員も会員の皆様と「ワンチーム」で頑張ります。あの年はコロナだったけど…そのことをバネに！

（※2ページ記事参照）

副会長　板橋 洋一
（文化サロン部）

初めて副会長という大役に就くことになりましたが、芸術のまちづくりを進める麻生区に少しでも貢献できればと思います。

（※3ページ記事参照）

副会長　山室 茂樹
（アカデミー部）

五十歳を過ぎて始めた俳句が縁で文化協会会員に。趣味の俳句、囲碁、茸採り、カラオケ、日本酒などで、日々の暮らしを楽しんでいます。

副会長　横川 博行
（美術工芸部・アカデミー部）

人が自由に触れ合うことの出来ないという、経験したことのない時代。心をみずみずしく保って文化協会の在り方を模索して行きましょう。

会　計　井上 俊夫
（文化サロン部）

文化協会に入会して日も浅く、不慣れな点も多々あるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

会　計　小田島 寛
（美術工芸部・広報部）

誰もが経験したことのない時代。いつまで続くのか見通せない日々ですが、不安な心を少しでも癒せる文化・芸術活動を守り、皆さんと共に支えていきたいと思います。

総　務　佐藤 勝昭
（美術工芸部・広報部）

平成二十年菅原敬子会長就任以来十二年にわたり総務をつとめています。地域の文化振興の一助になれば幸いです。

総　務　橋本 周
（アカデミー部・広報部）

文化芸術の担い手であります会員の皆様が愉しく豊かな活動展開ができますよう総務として心新たに努めてまいります。

監　事　正岡 皎
（舞台芸能部）

和哀協同　以和為貴　健康第一

監　事　横須賀 朝子
（舞台芸能部・広報部）

「文化・芸術のまち・あさお」の継承と発展、そしてその情報発信を微力ですがお手伝いしていきたいと思います。

（担当　関森）

新型コロナ感染症を乗り越えて アルテリッカ新ゆり美術展2020を開催

十二回目を迎えたアルテリッカ新ゆり美術展、今年は三月二日(月)～八日(日)に開催されました。会場は、今年も新百合トウェンティワンホールの多目的ホールを美術館仕様として使いました。

麻生区文化協会の会場風景

余り知られていないことですが、このすばらしい会場と照明などの設備は、ホールを運営する(公財)川崎市文化財団が無償で提供いただいているのです。

開催準備は、麻生区美術家協会、麻生区文化協会の両団体から推薦された委員による三回の実行委員会を経て行われます。

麻生区文化協会は、絵画四点、いけ花合作一点、書五点、写真十点、工芸十点の作品計三十点の展示に加え、文化協会主催の「舞台衣装をつけた民藝の女優さんを描くデッサン会」参加者の作品十五点の展示を行いました。

麻生区美術家協会の会場風景

麻生区美術家協会は、洋画十四点、日本画(水墨画含む)四点、工芸一点、彫刻二点の計二十一点を展示しました。

特別企画として、川崎市立高等学校合同芸術祭で受賞した高校生の作品四点が展示されました。

二月二十日の第三回実行委員会では、新型コロナウィルス感染症の拡大により、初日夕刻に予定していたオープニングパーティの中止を決定しました。

また、三月七日午後に予定していた佐藤英行さんによる座学「現代アートのこれから」と美術家協会のギャラリートークも、中止せざるを得ませんでした。

自粛ムードの中でしたが、新聞・タウン紙などの広報のおかげで、期間中千十一名の来場者がありました。このような状況の中でのご来場に感謝します。

（実行委員長　佐藤　勝昭記）

第三十六回かわさき市民芸術祭　美術展成功裏に終了

第三十六回かわさき市民芸術祭美術部門展が令和二年二月十八日（火）～二十三日（日）の六日間、川崎駅北口直結のアートガーデンかわさきで開催されました。

主催は、川崎市総合文化団体連絡会（総文連）です。今年度は、筆者が副実行委員長を務めています。展覧会の準備は、三回の実行委員会を中原市民館で開催して、各団体のご意見を伺いながら進めます。麻生区が広報担当なので、DMはがき・パンフレットをイラストレータソフトを用いて作成し、印刷通販にウェブ入稿しています。

当日のパンフレット

期間中六日にわたり、絵画四十七点、写真十八点、手工芸・フラワーデザイン二十八点、書十八点、詩歌二十点、華道前期七点。後期七点が展示されたほか、最終日を除く五日間、茶道家によるお点前がありました。なお、麻生区は、文化祭に出品した絵画八点、写真五点、手工芸三点、書四点を出品しました。

麻生区の書道展示

麻生区の絵画展示

新型コロナウィルスの感染拡大のため、三月八日に予定されていた市民芸術祭舞台部門の公演は、開催できなかったのですが、美術部門については、二月半ばだったため、開催することができたのは幸運でした。来場者も、昨年より二百名多い延べ約千四百名と、盛会裏に終了できました。

麻生区文化協会は、中部・南部の文化団体と交流する機会がほとんどありませんが、市民芸術祭や「文化かわさき」の編集などを通じて、質の高い交流ができており、麻生区の貢献は高く評価されています。

（佐藤　勝昭記）

火炎土器
内野勝雄作

さらなる芸術のまちづくりを目指して「Shinyuri Station Piano（しんゆりステーションピアノ）」

岩倉　宏司

川崎市では、総合計画において新百合ヶ丘駅周辺の「芸術・文化のまちづくり推進」を掲げており、小田急電鉄（株）との包括連携協定に関する施策を始め、地域との連携を通じた様々な地域活性化に向けた取組が進められています。

麻生区は多種多様な地域団体が芸術・文化に関する活動をしており、区民の興味・関心が高いエリアです。そこでさらなる「芸術のまちづくり」の推進を目指し、川崎市、小田急電鉄（株）、昭和音楽大学、新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム四者連携の取組として、新百合ヶ丘駅に誰でも弾けるピアノ「Shinyuri Station Piano」（しんゆりステーションピアノ　通称“SSP”）を、昨年から今年にかけて試験的に設置しました。（第一期二〇一九年十一月一七日～十二月二十五日、第二期二〇二〇年一月七日～一月二十五日）。

多い日は一日五十組以上の方達がピアノを演奏し、演奏に足を止めた多くの通行人が、拍手を贈るなど、地元の人たちにも受け入れられています。また、Youtubeでは、昭和音大生の演奏による「トルコ行進曲」が再生回数五百万回超えで注目を集めるほか、メディアではテレビ神奈川、東京新聞、地元の地域情報紙などでも紹介され、評判となりました。

今年度に、事務局としてNPO法人しんゆり芸術のまちづくりが加わり、SSP実行委員会を発足しました。コロナ感染防止の観点から来年の「アルテリッカしんゆり」を機に設置できるよう検討されています。

会員の活躍

柿生の里の物語

梶　亨さん著

当文化協会の会員である梶亨さんが表記の題名の本を出版された。題名にもあるように柿生とその周辺の地域で代々受け継がれてきた生活・文化について、様々な角度から詳細に調べて大変分かりやすく書かれている。二篇に分かれ、第一章「過去から受け継ぐ文化の土壌」、第二章「農村社会の記憶を辿る」の中からいくつかを紹介したい。

第一章では岡上にある東光院について詳しく書かれている。ここに安置されている仏像の中の一つで市の重要歴史記念物に指定されている兜跋毘沙門天立像については、読んでいて是非訪れて見学してみたい思いにかられるくらいである。また、日本の民俗学の祖とも言われ、「遠野物語」で知られる柳田國男や文学者・詩人として有名な北原白秋などが自然豊かな柿生の里を愛し何度もこの地を訪れていたこと、社会評論家で知られた河上徹太郎が片平に住み、河上邸には多くの著名な文芸家が心地よい農村風景を求め訪れていたことなども書かれている。そして、北欧文学の研究家、翻訳家として知られている山室静が九三才で生涯を閉じるまで片平に住み、山室に勧められ片平に創設された草木染めの工房の敷地内には、草木染めに共鳴した島崎藤村や若山牧水の碑も残されているという。

印象深かったのは当時文化協会二代目の会長であった箕輪敏行が柳田國男の民俗学に共感し、当時勤務していた西生田小学校の児童たちに自然と向き合うことや現地を訪ねながら学ぶことの大切さを教えるために、柳田を招きお話を聞かせたことなどは、大変興味深く読ませていただいた。また、麻生区の花が「百合」であり、木が「禅寺丸柿」であることや柿生の地名の由来が禅寺丸柿であることは多くの方が知っているが、この禅寺丸柿が八百年程前に王禅寺の山中で発見され、その後、江戸の市場では柿の王様ともいわれていたことなども詳しく書かれている。また細王舎の農機具のことや小水力発電の柿生発電所のこと、そして、私たち文化協会の大きなイベントの一つである「古風七草粥」についても書かれている。まだまだ興味深い内容のこともたくさん書かれているので是非一読をお薦めしたい。

この本を紹介させていただくことになり、著者の梶亨さんから下記のコメントをいただきました。

「明治・大正・昭和は遠くになりにけり」と言われるように、時代の変化は著しく、過去の大切なものを見失ってしまいそうな日々の暮らしの中にも「柿生」固有の歴史と文化、伝統行事、風物等は川崎の中でも際立った特色を持ち、今も各地域で継承されています。次代を担う子どもたちの地域学習活動や昔の寺子屋の精神を生かした現代の学習活動の場で、本書がお役にたてば嬉しく思います。

（岩田　記）

第三十六回産経国際書展で「産経準大賞」受賞

秋水書道会　木村　幾月さん

秋水書道会に所属されている木村幾月さんが、昨年七月から八月にかけて開催された第三十六回産経国際書展「現代書」部門で「産経準大賞」を受賞されました。この産経国際書展は、書芸術の交流を通じて国際親善の輪を広げ、また書技、創作活動の向上、発展を目指すとして一九八四年（昭和五四年）に第一回が開催されました。部門としては「漢字」「かな」「現代書」「臨書」「篆書・刻字」の六部門からなり、全国の書家のほか国外（フランス、中国、アメリカなど）からの出品も多いそうで、昨年の出品総数は六一五七点だったそうです。幾月さんが出品、受賞されたのは「爽神（きょうしん）」（意味は精神がさわやかであるでした）

（横須賀　記）

東京農工大への絵画寄贈で「紺綬褒章」受章

佐藤　勝昭さん

本会美術工芸部の佐藤勝昭さんに昨年十二月二十八日、紺綬褒章が授与され、今年三月二十三日、東京農工大学の大野弘幸学長から、章記、褒章、木杯が渡されました。佐藤さんは、大学の教職員・学生及び来訪者に安らぎを提供したいとの思いから、既に多くの絵画を大学に寄付されており、そのことに対して紺綬褒章が贈られました。

（橋本　記）

文化協会のこれから

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会

秋に延期されました。

◆十月三十一日(土)大会議室

夏休み親子教室

◆七月二十五日(土)～八月八日(土)

コロナウィルス感染防止及び休校の長期化を考慮して中止

麻生区文化祭

◆十月二十五日(日)麻生フィルハール

◆十月二十五日(日)吟舞吟詠　大会議室

◆十月一日(日)洋舞　ホール

◆十月一日(日)俳句大会　大会議室

◆十月三十日(金)～十一月五日(水)

(十一月二日休館日)美術工芸展／俳句展示　ギャラリー・ウォールギャラリー

編集後記

やっと「からむし」68号発行の運びとなりました。二月に企画編集会議を行った後、記事にする予定だった「プラチナファッションショー」「パラムーブメント in 麻生」「市民芸術祭舞台部門」が新型コロナウィルス感染防止のため、次々と中止になり、さらには文化協会の総会までもが市民館閉鎖のため、書面によることになり、編集会議も六月までできませんでした。

毎年開催していた「夏休み親子教室」も今年は小学校の休校が長引いたため、中止になるようです。新型コロナウィルスが収まって、皆様の活動は順調にできるようになることを祈っています。

（横須賀　朝子）

編集委員
岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本　周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報
からむし　第六十八号
令和二年七月十日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　菅原敬子
編　集　麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
麻生文化センター内
☎　〇四四－九五一－一三〇〇
印　刷　(株)エリアブレイン